



Kumamoto University

# 自然科学研究科だより

The Newsletter of Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University

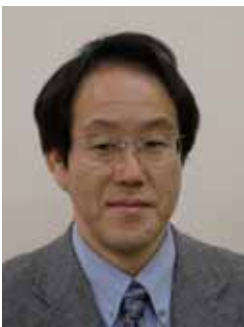
編集・発行 熊本大学大学院自然科学研究科広報委員会  
自然科学研究科ホームページ <http://www.gsst.kumamoto-u.ac.jp>

News Letter 2008.12  
No. 5

7

## グローバル COE プログラム「衝撃エネルギー工学グローバル先導拠点」(平成20-24年度) Global COE Program on Pulsed Power Engineering

複合新領域科学専攻教授/拠点リーダー 秋山 秀典



### グローバル COE プログラムとは！

グローバル COE (Centers of Excellence) プログラムは、生命科学、医学系、化学・材料科学、情報・電気・電子、機械・土木・建築・その他工学、数学・物理学・地球科学、人文科学、社会科学、学際・複合・新領域の9分野に関し、それぞれ12から14のプログラムを全国から選び、文部科学省が重点的に支援を行って、世界をリードする創造的な人材育成を行う事業です。

### グローバル COE プログラムの採択！

自然科学研究科からは、「衝撃エネルギー工学グローバル先導拠点」が、機械・土木・建築・その他工学分野のグローバル COE プログラムの一つとして、平成20年7月に選ばれました。5年間で10億円を超える大型プロジェクトです。関西より西にある大学からは、本プログラムのみが選ばれております。採択理由として、「衝撃エネルギー工学に特化した特色あるコンパクトな教育研究拠点として、将来構想が明確で、大学の支援体制が確立されており、優れた拠点形成計画と評価できる。人材育成面においては、少数精鋭の博士後期課程学生を事業推進担当者が集団で育成する形態を採っており、国際的な教育環境も具体化しており、確かな教育の成果が期待できる。研究活動面においては、工学と生物学の異分野融合を実践し、21世紀 COE プログラム(衝撃エネルギー科学の深化と応用)での研究活動の実績も優れており、国際的な認知度も高まっており、評価できる。」との、高い評価を得ています。

### 衝撃エネルギー工学グローバル先導拠点の構築！

本グローバル COE プログラムを推進する事業推進担当教員は、秋山秀典、大津政康、真下茂、後藤元信、河村能人、外本和幸、高野博嘉、伊原博隆、吉朝朗、斉藤寿仁、池上知顯、勝木淳、佐々木満、浪平隆男の14名から構成されており、協力教員6名を含め総勢約20名の自然科学研究科教員で活動していま

す。さらに、国内外からの客員教員、知恵袋教員、ポストドクター、博士後期課程学生等を含めると約60名に達します。グローバル先導拠点を構築するための特徴的な活動の一部には、次のようなものがあります。

- (1)海外の大学や研究所など、世界の約100機関との広範な国際的ネットワークがすでに構築されており、今後、海外リエゾンラボの設置など、さらに連携を強化します。
- (2)衝撃エネルギーの固体、液体、気体、生体に作用する諸現象の解明・応用は、排ガス処理、湖沼浄化、非破壊検査、コンクリート骨材分離、殺菌、癌治療、遺伝子組換え、ナノ材料合成、極端紫外光源、同位体移動、超強度 Mg 合金、衝撃物性データベースなどの研究の成果に基づいて、環境保全、資源循環、食品、医療、ナノテクノロジー、極限物性などの分野にまで、応用の裾野が広がっています。産業創生を実現するため、衝撃エネルギー産業化コンソーシアムを立ち上げつつあり、多くの企業からの参加を期待しております。ご参加いただける場合は、グローバル COE 推進室 ([g-coe1@jimu.kumamoto-u.ac.jp](mailto:g-coe1@jimu.kumamoto-u.ac.jp)) までご連絡下さい。
- (3)「衝撃エネルギーの科学と工学を基礎とし、専門の枠を超えた幅広い見方ができ、かつ豊かな創造性とグローバルな視野を持つ先導的人材」(次世代を担う国際的なリーダー)を輩出するために、色々なプログラムを提供しています。例えば、博士後期課程学生に生活費をサポートし、研究計画に応じた研究費とスペースを提供することにより、自由な発想で研究に専念できる環境を整えています。また、自ら特許出願ができるように弁理士による特許関連講義を設定し、海外での研究を体験するための海外インターンシップを実施しています。さらに、異分野融合研究の成果やアイデアを英語で発表議論する場として、英語での若手融合プロジェクトゼミナールを毎週開催し、専門、言語、経験など、全ての障壁を取り除いた Lab without Walls 環境の構築による人材育成を推進するための IMPACT (衝撃) プログラムを進めています(詳細はホームページ <http://ppe.coe.kumamoto-u.ac.jp> をご覧ください)。

CONTENTS

① グローバル COE プログラム「衝撃エネルギー工学グローバル先導拠点」(平成20-24年度) .....	1
② プロジェクトゼミナール「生命機能の多元的解析と統合ゼミナール」 .....	2
③ 大学院科学技術教育の全面英語化計画 (GRASIUS計画) の実施概要 .....	3
④ GJEC 招聘教員による集中講義 .....	4
⑤ 環境 MOT コース～みなまた環境マイスター養成プログラム～第一期活動状況報告 .....	5
⑥ 留学生の声 .....	6
⑦ 海外インターンシップ体験談 .....	7
⑧ 学生定員および在籍学生数 .....	8

## 2 プロジェクトゼミナール「生命機能の多元的解析と統合ゼミナール」

理学専攻生命科学講座教授 齊藤 寿仁

### ～平成20年12月。生命科学講座のとある研究室での S教授と学生Xとの会話から～

学生X「先生、今日プロゼミあるかどうかご存知ですか？」  
S教授「プロゼミ… ??? ああ、プロジェクトゼミナールのことね。(頭をかきむしり始める)」  
学生X「先生は確かプロゼミ担当の教員でしたよね？」  
S教授「プロゼミは、生命科学講座に所属する博士課程前期課程と後期課程の学生が行っている研究成果の報告と研究指導を中心とした学生参加型の研究セミナーなのだ！教員20名、博士課程前期と後期の学生あわせて約90名、テーマによっては興味ある4年生も参加するから、毎回プロゼミへの参加者数は100名近くになっているんだ。おそらく、本学で開催されている28あるプロゼミの中でも最も規模が大きいものの一つではないかな。ウオー！（なぜか叫ぶ）」  
学生X「先生、そんなに熱くならないで下さい。ボクはただ今日プロゼミがあるかどうか知りたいだけです。」  
S教授「何を言っておる。せっかくだから生命科学講座のプロゼミの特色についてももう少し話をしなさい。今年度から、後期課程の学生については英語で口頭発表と質疑応答を義務化しているのじゃよ。カテゴリー III じゃな。ちなみに、前期課程の学生さんは、発表は日本語でも、発表に使用するスライドの英語表記を義務化しているから、カテゴリーはIじゃ。ただ、今までの前期課程の学生さんの中には、英語で発表した人もいたし、今後、こうした学生さんが増えるかもしれない。そうなることをウイシュ（両手の親指、人差し指、小指を立てて、腕を交差する）。」  
学生X「先生、それはグラシウス（大学院全面英語化）計画と連携して、大学のグローバル化といったことと関係しているのですね。でも、発表する学生にとっては英語ってというのはハードル高いですね。」  
S教授「何を言っておる！志を高く持て！学問とはそもそもグローバルなものなのだ（ドンドン机をたたき出す）。ところで、きみはどこの学生だ？」  
学生X「先生の研究室にいる前期課程1年の学生Xです！自分の研究室の学生の顔と名前ぐらいは覚えておいて下さい。」  
S教授「すまん。しかし、今年度の生命科学講座の前期課程1年生は40名以上おるが、キミも含め皆優秀じゃな。準備は大

変だが、12月6日に工学部百周年記念館で開催予定の前期1年生によるフラッシュプレゼンテーション（口頭発表）とポスターセッションからなるプロゼミが楽しみじゃの～。ちょっとした学会のようで、良い経験になるだろうな。（ニヤニヤする）」

学生X「どうしたんですか。急に機嫌が良くなりましたね。」  
S教授「おお～、そういえば、学生の研究発表を中心としたプロゼミに加えて、今年度は外部講師によるセミナー形式も6回も開催され、充実していたな。作田正明先生（お茶の水女子大学大学院教授）、齋藤成也先生（国立遺伝学研究所教授）、井鷲裕司先生（京都大学大学院教授）、宮永龍一先生（島根大学准教授）、河内孝之先生（京都大学大学院教授）、原孝彦先生（東京都市臨床医学総合研究所プロジェクトリーダー）の先生の話から、動物から植物に至る先端的な様々な知識を得たの～。アッ、それと忘れてならないのは3月恒例の生命科学講座OBの方達によるプロゼミじゃ。生命科学講座を卒業後、どんな仕事をしているのか、学生時代をどのように過ごすべきか、先輩自身の経験をふまえた熱いメッセージが聞けるぞ！毎年評判のプロゼミだ！自らのキャリアパスを考える上で大変参考になるぞ。（口笛を吹き始める）」  
学生X「分かりました、是非参加します！でも、それ来年3月のことですよね。ボクが知りたいのは、今日のプロゼミについてなのですが…」  
S教授「おお！しまった！（急に立ち上がり、その勢いでイスが倒れる）今日は12月6日ではないか！前期課程1年生のプロゼミの日だ！（「遅刻じゃ！遅刻じゃ！」と叫びながら教授室から飛び出していく。）  
学生X「あっ、ここに今日のプロゼミに関するポスターが貼ってありました<sup>注1)</sup>。えっ！ボクの名前が載っているぞ!?ということは、ボクは今日、発表するんだっ！（「大変だ！遅刻だ！」と叫びながらS教授の後を追う。）」

注1) 今年度から、プロゼミの発表者名と演題が1週間前から廊下の掲示板や研究室にポスター掲示されるようになってきている。



フラッシュプレゼンテーション



ポスターセッション

# 3 大学院科学技術教育の全面英語化計画 (GRASIUS計画) の実施概要

自然科学研究科長／取組責任者 檜山 隆

大学院自然科学研究科では、国際的に活躍できる技術者・研究者を育成していくために、学生の異分野対応能力や実践的能力を涵養し、あわせて、国際社会でのコミュニケーションに必要不可欠である英語力の強化を図っています。前号の「自然科学研究科だより No.4」でもご紹介しましたように、現在、本研究科は教育・研究両面での国際化を一段と加速するために、平成19年度採択(平成19-21年度)の大学院教育改革支援プログラム「大学院科学技術教育の全面英語化計画 (GRASIUS: Graduate School Action Scheme for Internationalization of University Students)」のもと、英語を共通言語とする教育カリキュラムの再編や新たな教育プログラムの提供を開始するとともに本研究科を国際的に魅力ある大学院とするため以下に述べるさまざまな取組を実施しているところです。

- (1) 学生の海外活動支援：国際会議での研究成果発表や海外大学でのインターンシップに対する支援
- (2) 学生の自立的研究活動支援
- (3) 共同学位制度締結のための調査とその制定
- (4) 国際共同教育のための教員の相互交流：教員の海外派遣と海外協定校教員の招聘
- (5) 講義科目の英語化：教員の英語による教授法改善のためのFD活動支援
- (6) 海外大学に対する広報活動：外国人留学生および海外大学教員の受入れ推進
- (7) 本研究科主催学生国際会議の開催

本計画も本年度で2年目を迎えましたが、これまでのこれらの取組の実施状況についてご紹介したいと思います。

## 1. 学生及び教員の海外派遣

平成19年度は56名、平成20年度は112名の学生と教員を海外に派遣しました。学生にとって国際会議での論文発表や海外大学でのインターンシップは将来国際社会で活躍するためには必要不可欠であり多数の学生が海外経験を積んだことは大変喜ばしいことといえます。また、海外大学で講義を提供する教員の増加も本研究科が国際的に認められるために大変重要です。

## 2. 自立支援事業

博士後期課程学生が将来自立した研究者・技術者として国際社会の中で活躍するためには、研究プロジェクトの企画・マネジメントなど能力を身につけることが重要です。学生に自立した研究プロジェクトを立案・実施させるために研究プロジェクトを公募し、平成19年度は19件、20年度は9件のプロジェクトを採択し研究費を支援しています。

## 3. 英語能力テスト TOEFL-ITP の実施

自然科学研究科大学院生、博士前期課程進学予定の工学部、理学部4年次生を対象に、英語力の強化と学年進行による学生の英語力の改善度を把握することを目的として、英語能力テスト TOEFL-ITP 試験を実施しています。大学院生の受験者は平成19年度は60名、平成20年度は98名となり、受験者が増加していることからわかるように学生の英語学習意欲は確実に高

まってきました。また、本試験の実施が学生の英語力強化に大きく貢献しているといえます。



TOEFL-ITP テスト

## 4. 科学英語演習科目の配置

大学院生の科学技術英語力を向上させるため、3名の外部講師による対話形式のスクーリングと学習ソフトを使った自学習を行っています。平成19年度は試行段階でしたが97名の学生が受講いたしました。平成20年度からは「科学英語演習Ⅰ (スタンダードコース)」および「科学英語演習Ⅱ (パワーアップコース)」として正式に科目を配置し研究科共通科目として開講しています。スタンダードコースでは、108名の学生が受講し優秀な成績を修めました。また、現在51名の学生がパワーアップコースを受講中です。



科学技術英語科目のスクーリング

## 5. 総合科学技術共同教育センター・国際共同教育部門支援

平成19年4月に設置した本研究科附属総合科学技術共同教育センター(GJEC: Global Joint Education Center)・国際共同教育部門では、海外大学より客員教員を招いて、大学院生向け専門科目の英語による集中講義を提供しています。幅広い分野での講義提供を可能とするための支援により本研究科に訪れる海外大学教員が年々増加していることは喜ばしい限りです。

## 6. 学生国際会議 ICAST の実施

大学院生の英語による論文作成とプレゼンテーションに関するトレーニングの一環として、平成20年3月13-14日の2日間、本研究科主催の第1回学生国際会議 International Student Conference on Advanced Science and Technology (ICAST Kumamoto 2008) を実施し自然科学研究科および海外大学より103件の論文投稿と100名を超える参加がありました。なお、二日目には学生交流会を開催しました。第2回学生国際会議



ICAST Kumamoto 2008基調講演



ポスターセッション

(ICAST 2008 Beijing) は、平成20年12月22-23日の両日、北京大学工学院との共催により北京大学国際交流センターで開催します。本研究科からは約50名の学生が英語により研究成果を発表します。

以上、ご紹介しましたように大学院自然科学研究科が国際的に魅力ある大学院として海外に認知され、多数の外国人留学生や海外大学教員が定常的に在籍し、教育・研究両面でのより活発な交流が実施される場となることを願ってやみません。

## 4 GJEC 招聘教員による集中講義

GJEC 准教授／国際共同教育部門長 岸田 光代

GJEC (Global Joint Education Center for Science and Technology; 総合科学技術共同教育センター) 国際共同教育部門では、教員および学生の国際交流推進のため、海外の大学や研究機関より先生を招聘し、英語による集中講義を実施しています。平成20年度は10ヶ国から計14人の先生方による講義が計画されました。現在までに13人の方の講義が行われ150人以上の学生が受講しました。先生方の専門分野の話聞くばかりでなく、教育スタイル・文化の違いを経験し英語で勉強するよい機会となっています。来年度もより多くの学生が受講できるよう幅広い分野での開講を予定しています。



Desrues 先生と受講生

平成20年度 GJEC 招聘教員

教員名	所属機関
Sethuraman Sankararaman	Indian Institute of Technology Madras (インド)
Jin-Ho Choy	Ewha Womans University (韓国)
Etsuko Fujita	Brookhaven National Laboratory (USA)
Artiwan Shotipruk	Chulalongkorn University (タイ)
Stephane Azzopardi	ENSEIRB (フランス)
Levent Ballice	Ege University (トルコ)
Radosveta Sokullu	Ege University (トルコ)
Jacques Jean Marie Desrues	CNRS (フランス)
Roland Chapuis	Blaise Pascal University (フランス)
Kurunthachalam Kannan	State University of New York (USA)
Cheng-Hsin Chuang	Southern Taiwan University (台湾)
Charles James Lemckert	Griffith University (オーストラリア)
Andrzej W. Trochimezuk	Wroclaw University of Technology (ポーランド)
Harjinder Singh	Massey University (ニュージーランド)



シンポジウムでの Fujita 先生

環境共生工学専攻教授／プログラム代表者 石原 修

## はじめに

本学では、平成19年度（独）科学技術振興機構より地域再生人材創出拠点の形成プログラムとして「環境 MOT コース～みなまた環境マイスター養成プログラム」の採択を受け、水俣市と協働で「みなまた環境塾」を開講しました。平成21年3月には第一期生が卒業しますが、ここでは本プログラム第一期の活動状況を報告します。

## 1. プログラム概要

水俣市は、これまで市民・企業・行政が一体となり、持続可能な資源循環型社会の構築を目指し、積極的に取り組んできました。本プログラムは、そのような水俣市の運動に資するとともに、「みなまた」から環境保全の大切さを世界に発信できる人材の育成を目指したものです。

本プログラムの概要を図1に示します。プログラムは、人材育成コース「みなまた環境塾」と、一般市民向け公開講座（2種）からなります。

人材育成コースは、水俣市周辺の一般市民や企業・自治体職員を対象に1期1年半のカリキュラムです。このカリキュラムは「環境・リサイクル教育」、「地域マネジメント教育」、「個別課題解決対応ゼミナール」、「インターンシップ」の4つから構成されています。市民向け公開講座には、国内外の環境問題の専門家と交流する「イブニングセミナー」と、環境問題や地域おこしなど広いテーマで開催する「みなまた環境塾シンポジウム」があります。

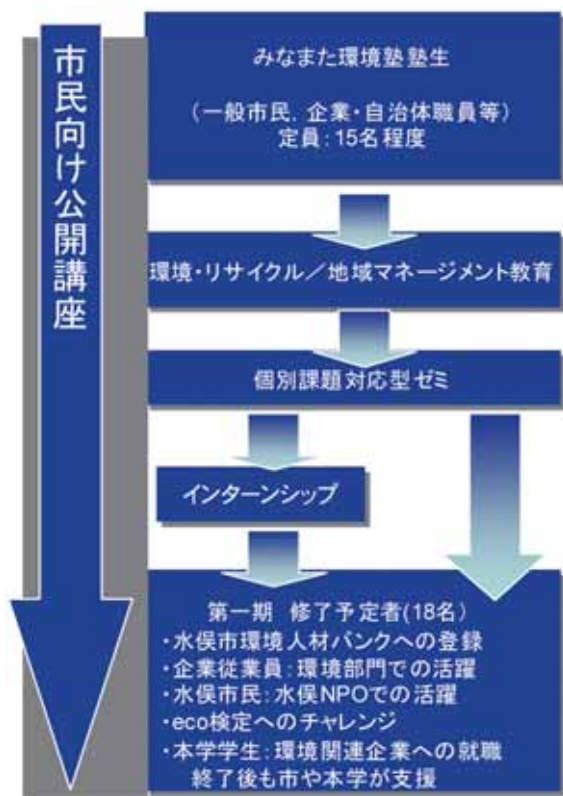


図1 本プログラム概要

## 2. 活動状況

みなまた環境塾の第一回講義は2007年10月におこなわれました。講義風景を図2に示します。講義は隔週土曜日午前中に3時間、20回実施しました。講義会場は水俣市ですが、熊本市や鹿児島県からの受講生もおられます。

個別課題ゼミでは、9人の講師が、9種類のテーマで塾生の指導を行いました。その様子を図3に示します。これは、仕事に役立つ技術の習得、地域興し、環境評価の実践など多様な塾生の課題に対応したものです。

公開講座の1つ「イブニングセミナー」は5回行われ、中国や東南アジアから講師を招き国際交流を行いました。各セミナーでは毎回20名以上の参加者が集まりました。福岡市など遠方の参加者もみられます。また「みなまた環境塾シンポジウム」では、第一回目を本学文学部徳野教授がコーディネーターで地域おこしをテーマに開催し、70名以上の参加者がありました。



図2 みなまた環境塾講義

## 3. これまでの成果

第一期生の卒業予定数は18名（当初計画15名）です。卒業前ですが、環境ビジネスを企画する者、市の環境モデル都市推進に関与する者、職場で成果の実践をする者などその成果が具体的になりつつあります。これからも修了生への継続的な活動支援が重要と考えています。



図3 個別課題対応型ゼミ



## Jean Leopold Ndeugueu

カメルーン出身  
博士後期課程  
理学専攻

Japanese culture is unique and interesting, people are unbelievably friendly and respectful. Of course I had many difficulties at the beginning because of language, especially learning Kanji. But in a very short time I became used to it, thanks to the International Student Center of Kumamoto University. There I made friends from many countries and it greatly broadened my horizons. My laboratory mates are serious enough towards work to stimulate constructive discussions under the supervision of Professor Masaru ANIYA who spares no effort to look after us like a father to his children. This environment can only be favorable to the emergence of the brain by the publication of several scientific articles. Participation to conferences with an average of 5-6 per year is an undeniable asset for us. This performance can't be possible without the support of GSST and other institutions.

(日本語の学習には苦労しましたが、熊本大学留学生センターでの授業のおかげでずいぶん上達しました。研究室では安仁屋教授の指導のもと皆熱心に研究を行っています。1年に5・6回も学会に参加することができ、自然科学研究科の支援にも感謝しています。)

\* \* \*



## 隋 偉平 (Sui Weiping)

中国出身  
博士前期課程  
建築学専攻

大学時代に、建築学の勉強と伴って、日本の現代建築に深い興味を持っていった。そのきっかけに、日本に留学する決意を固めた。今まで、熊本大学に勉強し始めから未だ二年間しかたっていないが、建築に関する様々な知識を学んだと同時に、日本の大学文化や人材育成システム等に対する認識も深めた。休みの間、熊本のあちらこちらに行き、写真を撮るのが私の趣味で、お寺や、神社、現代建築等いろいろ見たが、私が惹かれるのは城下町の町並み、人々の生活風景だ。そんな現代建築先進国であり、風情ある町並みも残る日本は私に対して一番魅力があると思う。



## Bayu Alamsari

インドネシア出身  
博士後期課程  
産業創造工学専攻

When I decided to continue my study as a doctoral student, exactly I was not so sure with my decision. I was pregnant and my husband is also a doctoral student in Kumamoto University. I wonder everything will be so difficult because I have no scholarship and need more money for my baby. But fortunately, I got full support from my sensei and received an exemption of my tuition fee. Another problem comes when I could not get baby school for my baby. I have to make a shift time with my husband to take care of my baby. Sometimes, I have to bring my baby to university or even a conference. Well, it was quite interesting experience when my baby cried in my laboratory or in the class. Thanks for many sensei and friends who have the kindness to understand of my situation and give me support.

(夫も熊本大学の博士課程の学生です。私費留学生であることや子供がまだ乳児であることから苦労していますが、先生や研究室の皆さんには、この状況を理解し援助していただいていることに感謝しています。)

\* \* \*



## Abu Kausar

バングラデシュ出身  
博士前期課程  
物質生命化学専攻

Really, it's a great experience to study abroad. I am studying in Kumamoto University since Oct. 2007. Before coming here I was little bit worried how I can adjust myself in a new place with different culture and language. But after coming here I found all people including professors and group members are very cordial and helpful to overcome the difficulties in academics as well as daily life. Learning about Japanese culture and language is also a pleasure for me. I appreciate all the initiatives taken by GSST such as ICAST, inviting guest professors, which will be very helpful to improve the academic excellence and communication skill.

(2007年10月に入学しました。入学前には文化や言語の違いを心配していましたが、先生方や研究室の皆さんはとても親切で、研究だけでなく生活面においても助けてもらっています。大学院の多くの授業は有益で、特に、外国人招聘教授の授業には大きな刺激を受けています。また、日本の文化や語学についても楽しく勉強しています。)

# 7 海外インターンシップ体験談

情報電気電子工学専攻／博士後期課程2年 Zhang Wei

熊本大学大学院自然科学研究科国際奨学事業「国際奨学金」並びに「大学院科学技術教育の全面英語化計画(グラシウス計画)」による支援によって、9月5日から10月26日にかけてフランスのボルドー国立高等電子情報学院(ENSEIRB École Nationale Supérieure d'Électronique, Informatique & Radiocommunications de Bordeaux)へ約二カ月間インターンシップに行ってきましたので報告いたします。具体的にいえばボルドー国立高等電子情報学院に所属しているIMS研究所のエネルギー変換グループでのProf. Stephane Azzopardiの指導のもと、高性能コンパクトDC/DCコンバーターを造りましたが、先生や周りの学生方から熱心に色々教えて頂き、最後まで円滑に進めることができました。また、英語における読解、リスニング、ライティングなど様々な場面で実践することで、総合的な英語力向上に繋がり、コミュニケーションスキルも改善することが出来ました。この2カ月間は個人的なビジョンのフィールドを広げ、私の人生にとって決して忘れられない



▲研究所での送別会、最前列左から5人目が筆者

貴重な経験となりました。末筆ながら素晴らしい海外留学のチャンスを与えて頂いた檜山隆先生と自然科学研究科の先生方々、職員の方々に深く感謝いたします。

\* \* \* \* \*

情報電気電子工学専攻／博士前期課程2年 右立 真輝

大学院科学技術教育の全面英語化計画(グラシウス計画)による支援を受け、9月上旬から2カ月間フランスのボルドー国立高等電子情報学院に研究インターンシップに行き参りましたのでご報告致します。

私はLaBRIという研究室に配属され、分散システムやモバイル機器の研究をなさっているSerge Chaumette教授に指導して頂きました。そこで「モバイル機器を用いた移動距離測定システムの調査と開発」に取り組む事になりました。

それに取り組むにあたり、文献を調べ、ディスカッションを行い、報告書を作成するという日本では当たり前に行っていた事をするのですが、言語が英語になった途端に困難な事へと変わり、始めのうちは非常に苦労しました。しかしながら、回数と時間を重ねることによって、総合的なコミュニケーション能力の向上を実感出来ました。その中でも特に私は専門分野に関する議論を英語で行う機会がそれまであまり無く、良い経験に

なると共に大きな自信に繋がりました。

また、自分自身が留学生となり、フランスの学生に加え、様々な国からの留学生と接する事により彼らの知識の深さやモチベーションの高さを知る事が出来た事は非常に良い刺激となりました。このインターンシップを通して得た経験と自信は残された学生生活やこれからの社会生活の大きな糧になると思います。

最後になりますが、このような本当に素晴らしい機会を与えてくださった関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

海外インターンシップ実績

平成19年度	
派遣先	派遣人数
バーミンガム大学(イギリス)	1
Blasie Pascal 大学(フランス)	1
北イリノイ大学(アメリカ)	1
グリフィス大学(オーストラリア)	1
計	4
平成20年度	
派遣先	派遣人数
Salford 大学(イギリス)	1
ランカスター大学(イギリス)	1
ボルドー国立高等電子情報学院(フランス)	2
グルノーブル大学(フランス)	1
ルンド大学(スウェーデン)	1
ロシア陸水学研究所(ロシア)	2
ホーチミン市建築大学(ベトナム)	2
フロリダ州立大学(アメリカ)	1
ジョージア工科大学(アメリカ)	1
モナーシュ大学(オーストラリア)	1
計	13



▶研究室の先生方と

# 8 学生定員および在籍学生数

## 博士前期課程

学生定員及び在籍学生数

平成20年5月1日現在

専攻	学生定員		在籍学生数								
	入学定員	総定員	1年次		2年次			計			
			留学生	社会人	留学生	社会人	留学生	社会人			
物質科学	—	—									
材料システム	—	—									
機械システム	—	—									
数理科学・情報システム	—	—									
電気システム	—	—									
自然システム	—	—				1			1		
環境土木工学	—	—									
建築学	—	—									
理学	100	200	118	1	89	2	1	207	3	1	
複合新領域科学	12	24	13	2	15	3		28	5		
物質生命化学	43	86	53	1	57			110	1		
マテリアル工学	25	50	27	1	27	1		54	2		
機械システム工学	57	114	65	2	56			121	2		
情報電気電子工学	81	162	100	5	97	6		197	11	1	
社会環境工学	38	76	46	2	54			100	2		
建築学	36	72	39	4	38	1		77	5	1	
計	392	784	461	18	434	13	1	895	31	3	

## 博士後期課程

学位授与状況

平成20年5月1日現在

区分	学術博士		工学博士		理学博士		計	
	課程	論文	課程	論文	課程	論文	課程	論文
昭和63年度	4+(2)		2				6+(2)	
平成元年度	12+(1)	1	3	2			15+(1)	3
平成2年度	5+(1)	3	2				7+(1)	3

区分	博士(学術)		博士(工学)		博士(理学)		計	
	課程	論文	課程	論文	課程	論文	課程	論文
平成3年度	6+(1)	4	1+(2)	1	2		9+(3)	5
平成4年度	7+(2)	2	5+(2)	10	2	1	14+(4)	13
平成5年度	10+(2)	2	10+(2)	8	5	1	25+(4)	11
平成6年度	5+(1)		7+(2)	13	7+(1)	1	19+(4)	14
平成7年度	6+(2)	1	10+(2)	6	(1)	2	16+(5)	9
平成8年度	5+(1)	1	4+(4)	7	5	2	14+(5)	10
平成9年度	3+(1)	1	17+(4)	7	10+(2)	1	30+(7)	9
平成10年度	9		19+(2)	17	2	2	30+(2)	19
平成11年度	12		16	7	6+(1)	1	34+(1)	8
平成12年度	11		20+(6)	5	10+(3)	3	41+(9)	8
平成13年度	4+(2)		31+(10)	3	7+(2)	5	42+(14)	8
平成14年度	6+(1)		23+(8)	2	6+(4)		35+(13)	2
平成15年度	4+(1)		24+(4)	4	5+(1)	2	33+(6)	6
平成16年度	7+(1)	1	28+(6)	1	8+(2)	2	43+(9)	4
平成17年度	7+(4)	1	28+(14)	1	8+(5)		43+(23)	2
平成18年度	7+(2)		43+(5)	4	7+(5)	1	57+(12)	5
平成19年度	7		41	3	8	1	56	4
計	137+(25)	17	334+(73)	101	98+(27)	25	569+(125)	143

(注) 1. 平成3年7月に学位規則が改定されました。 2. 課程内の( )書きは、さかのぼりで授与された者を外数で示す。

学生定員及び在籍学生数

平成20年5月1日現在

専攻	学生定員		在籍学生数											
	入学定員	総定員	1年次		2年次		3年次			計				
			留学生	社会人	留学生	社会人	留学生	社会人	留学生	社会人				
物質・生命科学	—	11						8	2	4	8	2	4	
生産システム科学	—	22						10	4	3	10	4	3	
システム情報科学	—	16						18	4	10	18	4	10	
環境共生科学	—	20						17	2	8	17	2	8	
理学	10	20	12	1	1	14		6	5	1	2	31	2	9
複合新領域科学	18	36	15	8	4	22	5	11	13	4	4	50	17	19
産業創造工学	14	28	13	4	5	11	1	7	12	4	4	36	9	16
情報電気電子工学	10	20	17	10	4	18	7	8	1		1	36	17	13
環境共生工学	10	20	11	7	11	2	8	13	1	1	6	35	3	21
計	62	193	68	23	21	76	15	40	97	22	42	241	60	103

編集委員会

西本昌彦, 千吉良直紀, 原 正大, 菊池 茂, 磯部博志, 高宗和史, 伊田進太郎, 松田光弘, 宗像瑞恵, 胡 振程, 中村能久, 藤見俊夫, 大西康伸, 岸田光代, 小島智絵, 瀧尾 進